

平和の礎

海外引揚者が語り継ぐ労苦 Ⅱ



平和の礎

海外引揚者が語り継ぐ労苦Ⅱ

平和の礎

海外引揚者が語り継ぐ労苦Ⅱ

平成四年三月三十日 印刷

平成四年三月三十日 発行

編集 東京都文京区大塚五丁目三ノ十三
発行 平和祈念事業特別基金
印刷 第一法規出版株式会社

まえがき

平和祈念事業特別基金は、今次大戦における尊い戦争犠牲を銘記し、かつ永遠の平和を祈念するため、関係者の労苦について国民の理解を深めること等により、関係者に対し慰藉きせきの念を示す事業を行うことを目的として「平和祈念事業特別基金等に関する法律」に基づいて設立された。

基金法には、この目的を達成するために行うべき各種の業務が定められているが、この「平和の礎——海外引揚者が語り継ぐ労苦——」の作成は、その中の関係者の労苦に関する調査研究並びに関係者の労苦に関し、出版物を作成し及び頒布する業務に係るものである。

この業務の実施に当たり、基金は、平成元年度から社団法人引揚者団体全国連合会に、主として次の三つの観点から引揚体験者の手記の執筆等の方法により、労苦の実態を明らかにすることをねらいとして調査研究を委託した。

- (一) 海外居住の動機と家族状況
- (二) 終戦直前・直後の生活の変化
- (三) 引揚及び生活安定までの労苦

連合会では、基金からの委託に基づき、全国的に広範囲にわたり活発な調査研究活動を展開し、関係者から数多くの手記等を収集し整理の上、「引揚者労苦体験記録」として基金に報告がなされた。

報告された労苦記録の各篇々には、旧満州を始めとして海外居住者の引揚げにまつわる数々の労苦がつけられ

ており、過酷な状況の中で生死の境をさまよいながらの引揚げ、引揚げ後の生活再建の過程での艱難辛苦といった労苦の実態が、簡潔であるが往時を想起させるに十分な迫真の筆致で生々しく描かれている。

戦争の残虐さ、残酷さ、悲惨さ、その上に無意味なものか、翻えって平和の尊さ大切さを心に深く印し、子々孫々に語り継いでいくためには体験者にして初めて明らかにされる具体的な労苦の記録は、この上なく貴重なものであり、その労苦を徒労に終らせないためにも、永く保存され周知されるべきものと認められる。

基金は、今般連合会から報告された平成二年度分の労苦調査記録を基金の設立目的に照らし、その成果を基金業務報告資料として取りまとめるとともに、本資料を永遠の平和の礎として出版物として頒布することにより、平和祈念事業の一層の理解と認識を深めることに資することとした。

調査に当たられた連合会関係者のご努力と寄稿された多くの方々のご協力を感謝するとともに、本書が平和祈念の書として広く役立ちうるならばこれに越した喜びはない。

平成四年三月

平和祈念事業特別基金

理事長

藤井良二

海外引揚者が語り継ぐ労苦 II 目次

まえがき

〔満州〕

憲兵から敗戦をきく

鼓膜が破れて

満州敗戦体験記

惨たんたる八年間の強制労働

女学生私の恐怖の体験

開拓団診療所長そして死へ逃避行

あこがれの満鉄に入り十三年、

そして敗戦

見捨てられた在留邦人

撃たれた友二人は

敵中縦断三千里

ホロンバイル死の脱出行

思い出

敗戦の苦悩から発奮

ふるさとへの道は遠かった

引揚げ者労苦の断片

藤井 良二

頁

結城吉之助

1

高橋 才吉

2

中山 彰

4

斎藤 善作

6

藤井 貞

8

柴田 正雄

9

渡辺 忠

11

吉田アサ子

12

高野 毅

13

小曾川才松

15

折居 次郎

17

小玉 静江

19

大本 啓二

20

羽柴芳太郎

22

鳥海 啓雄

23

無念、帰国時に日本で長男の死

北満で女一人、三年生きた

三町歩は遺体の山

在満十五年の足跡

小さな目で——チチハルから

地獄への彷徨

撃ちのめされた興亜の礎

脱走、三十八度線徒歩突破

タバコ売りして

中共、強制抑留の思い出

思い出

夫、長男、次女、無念の死

夢はるかな旅順

ああ、弟よ、妹よ

二か月がかりの帰国

禍福はあざなえる縄

さつまいもの弁当

引揚日記

満州での死の逃避行

田中 正吾 26

木村 ぬい 28

小池 ウメ 30

斉藤 勝好 31

馬場 永子 33

佐々木 飯子 35

石井 侃 37

日高 亮明 39

坂元 安雄 41

相馬 勉 43

佐藤 於富 46

横須賀 房子 47

中沢 京子 50

河野 忠昭 52

荒牧 実 53

松本 和子 55

田辺 昌亮 56

中島 歌子 58

中村 久尚 59

(子どもの霊に捧ぐ)

追憶 亡き父母を偲んで

私の敗戦体験記

終戦後の北満チチハル

満州から引揚げるまでの

労苦に耐えて

家族さがして五か月目

原爆による弟の死

我家の敗戦の記憶

満州からの引揚げに思う

奉天の家を追われて

満州からの引揚げに泣く

引揚者体験の記

敗戦の満州脱出記

死の逃避行

引揚者体験の一断片

ジャムスから二人の子と

家族や引揚げの事

引揚者体験の一断片

青山由喜子 66

木村久美子 69

鈴木 衡美 73

宮腰 ふみ 76

面川 三良 78

竹内美和子 80

樋口 良雄 81

村山八代子 83

山本 清子 88

小島まつよ 91

吹田シノブ 93

松本 國忠 95

福田 むめ 98

佐藤甚之助 100

佐藤みつ江 102

今野 忠市 104

武田荘太郎 106

書き残したい満州からの引揚げ

佳木斯から遠い山形への旅路

惨たんたる大陸の終焉

ああ、異郷に散った妻と娘よ

玄海をこえて

命がけの石炭拾い

強盗にあったチチハル

毎日が不安と恐怖

安東よりの逃避

三人の子と涙の逃避行

三人で死のう

霊よやすらかに

妻、栄子

満州の思い出

国策で渡満、開拓したが

十一年の満鉄生活

消えぬ想い出

あの戦争が奪った私の希望と夢

ああ、父よ母よ満州よ

飛渡キミノ 107

村岡 俊子 108

阿部 恵一 111

遠藤 新一 113

山中 新一 114

笹沢千方子 115

水谷 寧子 118

山内 弘子 120

長池 謙一 122

小南 艶子 123

星野ヨシ子 125

前田 トキ 126

宮木 勝弘 128

兼城 千代 129

山本 義雄 130

松永 三郎 132

伊藤 もと 133

大江 徳明 135

西岡智恵子 137

生死の幾山河

暗黒の新京

滿蒙開拓に参加の動機

若き日の思い出

報国隊員として

満州の思い出

拓友と妻の靈位にささぐ

開拓義勇軍の最後

集団自決で生き残った七人の小学生

引揚げ当時の思い出

二児失い、四十日間の逃避行

引揚げ時の苦勞

引揚げ者の体験

分村開拓団の崩壊

惨たる逃避行ひと月間

坂下分村放浪記

母、長男、長女を彈春の地に

朝日開拓団の末路

第九次東三河郷開拓団の末路

平木 重男 140

平野 勇 141

長倉 直松 145

大山きぬよ 148

鈴木喜阿子 149

東海林照代 151

佐藤 貞彦 152

沢田 貞 153

岩崎 スミ 155

清水 久子 160

高瀬 三郎 163

加胡川俊徳 165

森谷 フサ 166

飯野 清平 168

鈴木 正一 171

楯 ふさ 173

中谷 信一 174

下島 寅三 176

夏目 安男 179

扎蘭屯逃避行

十五歳の開拓義勇軍勇士

長男の死、長女今も

カリエスの身

開拓農場主として

三十八度線川渡りの脱出

満州国の日本人避難民救出について

他人の子を連れ帰る、悪戦苦闘

残留し、病弱者の輸送に

開拓団員のために私を捨てて

満州の建設と召集と

青任者として引率、引揚げ

産婆として生きぬく

橋頭で終戦、ギユウギユウの貨車で

銃に立ちはだかった母の愛

大原 芳鐘 180

田口久太郎 182

森原 敏直 184

小川 逸次 186

佐々木春人 187

湯沢 昌志 190

藤川タマオ 192

藤田 昭一 194

塩沢 直利 195

原 豊重 197

曽根 正 199

富岡 次子 200

岡崎タカ子 202

齋藤 桂子 203

〔樺 太〕

樺太引揚者としての体験記

戦後、四十五年に想う

敗戦から今日まで

悪夢の逃避行

私の樺太居住のすべて

終戦と引揚げの時のこと

私の戦争体験記

爆撃、停電、海底二千米の端島礦、

水没の梯子をよじ登る

北樺太の抑留に耐えて

敗戦後の空襲

少年時代の終戦に思う

引揚げ、密航船

樺太から砂川へ

私の引揚げ体験記

苦闘実らせた引揚者群像

私の戦争体験

終戦と私の戦後

佐藤 道三 206

長浜みさ子 208

安彦 昭 210

佐藤 栄子 212

村上 善徳 213

河面 真一 215

兼松 淳子 217

中嶋 栄吉 219

中谷 豊 221

三上 敏子 223

河合 昌一 225

和泉 春豊 227

日浦 トミ 229

斉当 瑞穂 231

新田 平治 232

高塚 稔 235

川上 悦夫 236

小学校四年生の終戦の思い出

澱粉かすの思い出

引揚者として心は錦なのに

姉は目の前で銃殺

沈没した小笠原丸に家族を乗せて

追憶

終戦時の苦難を乗り越えて

樺太引揚げの労苦

燃える恵須取

引揚者体験記録

樺太引揚者の断片

ボンボン船で密航

戦後を生きぬいて

引揚げ前後の苦い思い出

戦後の父母を偲んで

敗戦体験と引揚げ後の労苦

二度と再びあの苦労はと思う今

引揚げ・開拓に入植、

荒地に悩む十年

小野寺信子 238

小川 幸子 241

小田みよ子 243

大谷 輝子 244

須藤 昭一 246

川崎 ヤス 249

佐藤 晴夫 251

鈴木 清 254

大木 義人 255

松川 正吉 258

吉川金次郎 260

高畑 宏 261

佐々木ツワ 263

原田 宏 266

佐々木千恵子 269

山本 フジ 271

北野 喜美 273

佐々木末太郎 274

次代の平和な礎となった人生に満足

私の一生を変えた戦争

樺太から、八人の子を育てて

日本の敗戦と私の半生記

私の終戦前後

終戦と私

磯舟に乗って逃げ帰った

夜空を赤く染めて炎える豊原を後に

シベリア帰りの亡き父を偲び

私の人生体験

引揚者体験の一断片（塩倉庫収容）

五十四年目の追憶

〔朝 鮮〕

引揚げの記録

捕虜、脱走、無一文、悲劇引揚者

三女を失い、私は強制収容所へ

技術者として残留

北鮮より帰る

伊藤 清治 278

斉藤 タカ 281

渡会トヨメ 287

田畑 喜一 288

橋詰 春水 290

橋本 幸彦 292

満月 敏 295

高橋 敬子 297

菅 昌俊 299

白川 ハギ 301

中川 教徳 304

紺野 敏夫 306

後藤喜三次 309

前花 哲雄 310

川澤 利幸 312

鎌田 末雄 313

住田 照雄 315

敗戦と北朝鮮からの引揚げ

我が家の運命を変えた戦争

北朝鮮の回想

私の青春のすべて―韓国

妻を探して羅津から撫順へ

妻死亡、子どもだけの引揚げ

家族七人ぶじ帰国

貨物船で脱出、帰国

元山から恐怖の逃避行

むくわれずに、父母よ

戦後の思い出新たに

残酷行状記

朝鮮、餓死寸前より

五人の子を一人で連れて

闇船で脱出

涙のおにぎり

平和で強い国であって欲しい

もう戦争はいやです

位田 邦夫 316

谷口 雅枝 319

内藤 美雪 322

小田部チエ子 324

岸本 諒二 326

遠藤 正雄 327

中洲 武八 328

召田 房江 330

青木 幸代 332

高木 徳子 334

安達ひで子 336

阿部美代子 337

内藤徳治郎 339

中原 治子 340

種田 繁寿 342

鎌田 亦夫 343

有満 昌子 345

田子 良美 347

〔中 国〕

戦中を機関車と共に

中国青少年の育成に夢

中国からの引揚げ

病弱のむすこを抱えて

主人を凶漢に襲われ子供二人と

引揚げて

化粧品と共に

現地除隊と引揚げ記

私の引揚体験

恐怖と絶望の日々

弟を失い、北支より

大連十八年、北京一年の青春

宣化より帰る

青雲の志を抱いて渡航そして引揚げ

引揚げ時に、お金と食料をくれた人

引揚船「江島丸」の沈没

身重の引揚げ

中村祐太郎 349

戸上 恭二 351

石山 八郎 353

田淵賢太郎 355

斉藤 登代 357

三鼓 安治 359

南 栄次郎 361

久米 弘 363

土田ヒサ子 364

小沢三千江 365

青木 彌生 367

保利 電 369

神事 重人 370

中井 千秋 371

北川 正 373

金子 イチ 375

〔台 湾〕

台湾からの一引揚げ者の感懐

涙は消えず、台南よ

二人の子に支えられ

台湾から静岡、東京での新生活

〔その他〕

シベリアに送られて

南洋から引揚げて

あとがき

大久保三郎 378

小島平一郎 379

熊井 光子 381

加藤シズエ 383

市川 洲二 385

菅原タケ子 387

満州

憲兵から敗戦をきく

山形県 結城 吉之助

東満にいた私たち三千余人は牡丹江から最後の列車に乗ってハルビンに向かった。これは東満国境の日本男子はみんな召集令状をうけ、軍からハルビン南下を命令されたためである。家族とわかれ、日本軍の力を信頼し、決意もあらたに出發したのだった。

列車内の一夜があげ、大地からあかあかと朝日があがったが、みんな落ちつきのない放心状態だった。そうしているうちにはるか向こうのレール上で日の丸の旗をふっている数人の軍人の姿がみえた。列車はとまった。

なにごとだろうと団体の指揮者だった私は、十数人と降りて軍人とあった。

ところが、その軍人は直立不動の姿勢で「私どもは一面披（イーメンバ）憲兵分隊であります。電波を通じて終戦の詔勅がありました」と伝達した。みんなは驚き、うそだ、日本の憲兵までソ連のスパイになったか、殺してしまえ、といきりたった。列車から百人あまりの人が出てきて憲兵分隊になぐり込みをかけた。

憲兵は直ちに輕機二門をわれわれに向けた。

兵舎から隊長が一枚のタイプ用紙を持ってでてきた。それを読み終わり「このとおり内地から入手したほんとうのものだ。日本人同士が相うつことはやめてくれ、ハルビンにゆけばどうなるかわからないが、終戦の大御心を体して行動すべきだ、無念千万なのは一億の国民みな

同じだ。私も憲兵は奥地の日本人に終戦を伝える義務があり、この地にとどまるが、生きて日本に帰ることは望んでない」と声がふるえていた。悲痛な場だった。

憲兵とわかれて列車にもどり、終戦を伝えたところ、みんな発狂したように泣く、わめくの混乱だった、ある人は札箱をこわし、レールの上で満州国紙幣をやいてしまった。そのうち列車の中から一発の銃声がきこえてきた。不吉な予感がしたが、はたせるかな自殺だった。

やがて、列車は力なげに動いた。妻子と兄弟とわかれ、財産のすべてを放棄しての逃避行になってしまった。

終戦をきいてからの姿はみな一変し、たちまち団結は乱れ、自分さえ生きればよいという人間に落ちてしまった。列車の中で食べている子どもものにぎりめしを奪って自分の口に入れる大人がいた。

子どもは火がついたように泣き叫ぶ。子どもの親は鬼のような顔して、どろぼうどろぼうとののしる。途中から乗った開拓の農家の人らしかった。

ある駅には満人少年の掻払いがいたが、満州現地人から飲料水を運んでくれたり、卵をくれたりもした。そし

て日本は負けたが、十年後にはまた満州にくるのだからと親切にいいかせる満州老人もいた。

牡丹江からハルビンまでの鉄道沿線は、山あり、谷あり、平原ありのすばらしい景勝の地だが、ソ連の空爆をくぐり抜け、敗戦を知らされた目にはなんの感動もなく、心はどん底にたたきのめされていた。

翌日の午後、ハルビン駅についた。大勢のソ連兵がまぢかまえていた。

数千の日本兵はソ連兵に引きずられ、ハルビン郊外の捕虜収容所に投げこまれた。収容所とは原野に鉄条網をはりめぐらした青てんじょうの牧草にめぐらするところだった。

鼓膜が破れて

北海道 高橋 才吉

昭和十年頃小樽駅員として働いていました。その当時品川義介先生が琴似に白雲山荘として全国より青年を盛

り立て世のため人のためになることを望み人間教育をされておりました、矢先に満州へ行って活躍して見ないかと言われ、先生の義理の弟に当たる中村さんに紹介下されたのです。「昭和十二年春、早速満州へ行くことを決意し小樽駅を退職し奉天へ向い中村さんに会い奉天駅に勤務することになり、満州人とともに生活が始まり、言葉や何かの点で色々難点はありましたが、心と心の結びが大事であり、仲良く頑張りました。

昭和十四年八月錦県錦州大野部隊へ召集され入隊、同年十月三十一日除隊になりました。

戦争が段々激しくなり、昭和十七年頃一応の事情もあり奉天駅を退職し大連の大同公司に勤務、昭和十八年四月頃北支那派遣軍総指令部獣医部獣医室に軍属として勤務し、昭和十九年二月頃現地召集兵として済南の第十二軍管轄混成第十四旅団第四中隊に入隊する。

同年六月上旬から大行作戦に参加し、店子集部落付近の戦線で銃弾と爆音により受傷、そのとき爆音により左耳に傷みを感じ、左耳がまったく聞こえなくなりその後約一時間くらいたってから戦友から耳より血が出ている

とのことで気付いた。暫くしてから野戦病院へ行き診療を受けた。軍医官は鼓膜が破れ、耳鳴り、耳だれの状態を話され入院を命ぜられたのです。

入院加療の結果、両感音性難聴となり特に左耳は全然聴こえなくなり八月上旬退院したのです。

部隊は行軍から行軍を重ね終戦は昭和二十年八月であつたのだが我々は昭和二十年十月です。

私始め現地召集兵は終戦地で召集解除となり、在留地までいかにして帰ったらいのか、痛烈身に染みる思いでありました。私ども四、五人は北京天津方面で後はそれぞれ如何致したことであろうか誠に痛惜に堪えません。「私達も身に支那服をまとい目的地の妻や子供のいるところへ一日も早く着きたい一心でタアーピンという大きなパンを背にしながら歩いたのですが、德州付近で八路军に会い、一人一人が目隠しをされ別々の部屋に通されたのです。

ここで何か言われ銃殺されるかも知れないと思った。だがこの部屋で一泊し朝方の点呼後色々八路军に対し協力することを誓い馬車で隣り部落まで送ってくれました

ので私共も一応安心してまた歩き出した。

夜は民家の軒下で寝たり草むらで野宿し、夜間になれば銃声が響き渡ってくるといった状態の毎日である。目的地の天津まではまだまだ歩かなければならないのだ。

天津に到着したのは十月の末頃でお互い同志の健康と現在までの無事であったことを祝し、今後もし幸せであらんことを祈って別れた。

戦争という痛烈極まる悲劇に私は胸が一杯であった。

昭和二十一年五月上旬米軍の上陸用舟艇で一般在留邦人と一緒に天津塘沽より舞鶴港に上陸し故郷の小樽に帰って来ました。

その頃は食糧がないので買出部隊にまじり家のため近所の人のために働きました。

戦前国鉄小樽駅に駅員として勤務しておりましたので両感音性難聴でなければ就職できたのですがこれも出来ぬし食糧難の関係もあり、自分で緊急開拓者として両親兄弟をつれて現住地の赤井川村へ入植したのです。昭和二十三年四月でした。

昭和二十四年三月同じ開拓者の仲間の家から嫁を迎え

草小屋（三角小屋）から開墾が本格化し、石礫、木の根、笹の根をスコップで掘り畑を作り食糧難をのがれた。だが販売する農作物が少ないので暇を見ては札幌などへ出稼ぎをし子供達の養育費としたり、肥料代等の一部とした。

なお、食糧基礎となる稲作には造田をしなければならず、朝早くから夕方おそくまで頑張り、食糧として供出するまでになりましたが、年々歳々体も弱り開拓者生活、満四十年の歴史に終止符を打ち、現在は市街地へ移り保養に努めております。

満州敗戦体験記

北海道 中山 彰

海外居住の動機

赤い夕陽の満州に！ 私は満州鉄道警護隊員として銃をとり、妻は南満盤山県地区開拓団員として鋤を持って渡満しました。

私は奉山線錦州隊に着任、先輩指導の下に実務につきました。任務は鉄道用地内の警察業務の執行と、防諜謀略行為に対する特殊任務が目的でした。

当時北支戦線は日増しに拡大され、軍事輸送路線として重要な地点にありました。毎日錦州駅において、乗降客に対し身体及び携行品の検問検査を行い、不逞者の武器、密輸品、阿片、統制品、暗号類の検挙に励みました。業務も次第に熟達し列車警乗勤務となり、次いで沿線各駅の警護分所勤務となり、満系隊員とともに日夜警護任務に万全を期しました。

また鉄道愛護精神普及のため、沿線住民青少年を対象に宣伝宣撫工作も行いました。

治安の悪い吉林省、敦化、熱河省、朝陽地区、の鉄道警備の応援助勤にも出勤、任務を果たしました。

しかし大東亜戦の戦況が次第に悪化すると満州住民の動向が変化し予断を許さない緊迫した情勢が現われはじめました。

終戦直前後の激動状況

一、終戦間近関東軍の、在郷軍人の大量動員召集は、極

度な生産基盤の動揺、残留老人、婦女子に、対する精神的な犠牲と、被害をもたらした。

二、対ソ戦略防衛のための新京撤退通化作戦計画は、有名無実ひたすら人民に対し動揺を与えたのみ。

三、王道楽土建設も五族協和も、実効なく画。

四、行政交通警察、金融、等の主要機関の閉鎖は、僻地住民指導を欠き避難行動に支障混乱の原因である。

五、満系駐屯軍の反乱発生、引揚住民へ被害大。

六、抗日分子の煽動により、一般住民が暴徒化し、商店、住宅、物資倉庫、寺院、神社に対し、喚声を叫び襲撃による恐怖と、被害の二重の苦発生。

七、国民軍、中共軍の、国内進攻内戦により退却時に発生した日本人に対する強制徴用使役に恐怖増大。

八、元満州国幹部、警察官、軍人、教師等は、国家漢奸と称し、連日逮捕投獄ソ連国への連行拉致、密告、告発等、最大の恐怖時代に入る。

九、其の他統制なき使役強要、住居侵入、数限りなし。

なお病人死者は、付近の公園、山野に埋葬。

敗戦により天も慟哭して、連日記録の降雨、輸送途中